

# 雲華上人の未刊漢詩稿

——新出『雲華草二卷』の翻刻と解題——

湯 谷 祐 三

## 一、雲華上人の漢詩稿「雲華草」とその伝残状況

雲華上人（一七七三～一八五〇）とは雲華院釈大含信慶講師のことで、大分県中津市永添の古城山正行寺（真宗大谷派）の住持であり、長年にわたり東本願寺高倉学寮の講師を務めた学僧である。雲華の学識が仏教学・宗学を本色とすることはもちろんであるが、一方で漢詩と墨蘭画を愛好する文人趣味を持ち、江戸後期の京都において、頼山陽や田能村竹田・浦上春琴らと稀に見る文雅の世界を形成したことで知られる。

雲華は、自己の漢詩作品を編年で記載した草稿冊子を「雲華草」と名付けていた。その「雲華草」を中心に雲華の漢詩文方面の著作を活字翻刻したのが、昭和八年に刊行された翠陰赤松文二郎氏編『雲華上人遺稿』（以下『遺稿』）で、従来雲華の漢詩文研究の基礎資料となっている。<sup>1)</sup>

しかし本書は、編者自身その「凡例」で「本書収むる所雲華草の如きもと十六卷ありしよしなれども今は僅に其

半数を留め(後略)」とあるように、かつて存在した「雲華草」のすべてではない。「総目次」によれば、『遺稿』に収録された「雲華草」は「巻五(一二三四缺)・巻六・巻八(七缺)・巻十(九缺)・巻十一・巻十四(十二、十三缺)・巻十五・巻十六」の合計八巻であるから、編者が言うように「雲華草」が全十六巻だったとすれば、その半数が『遺稿』に収められたことになる。ここではひとまず「雲華草」の総数を全十六巻であったと仮定して、『遺稿』における「雲華草」各巻の伝残の有無及び収載年次についてまとめてみよう(表1)。

表1 『遺稿』における「雲華草」の伝残状況と収載作品年次

存否	巻数	収載年次	合計年	連続性
×	巻一	?年~?年	?	?
×	巻二	?年~?年	?	?
×	巻三	?年~?年	?	?
×	巻四	?年~享和三年(一八〇三)?	?	?
○	巻五	文化元年(一八〇四)~文化四年(一八〇七)	四年間	連続
○	巻六	文化五年(一八〇八)~文化七年(一八一〇)	三年間	連続
×	巻七	文化八年(一八一一)か?	一年間	連続
○	巻八	文化九年(一八一二)~文化十二年(一八一五)	四年間	連続
×	巻九	文化十三年(一八一六)か?	一年間	連続
○	巻十	文化十四年(一八一七)~文政四年(一八二二)	五年間	連続

○	卷十一	文政五年（一八二三）～文政九年（一八二六）	五年間	連続
×	卷十二 卷十三	文政十年（一八二七）～天保二年（一八三一）	五年間	連続？
○	卷十四	天保三年（一八三二）～天保五年（一八三四）	三年間	連続
○	卷十五	天保五年（一八三四）～天保八年（一八三七）	四年間	連続
○	卷十六	天保九年（一八三八）～天保十四年（一八四三）	六年間	連続

この状況を見ると、まず「雲華草」巻一から巻四までが欠落しており、雲華三一歳の享和三年（一八〇三）までの、雲華「初期」の漢詩文学作品が不明であることがわかる。今回紹介する『雲華草二巻』（写本一冊）は、まさにこの欠落時期の内の享和元年から同三年の計三年間の雲華の漢詩を収録する新出資料なのである。

『遺稿』は、雲華三二歳の文化元年（一八〇四）から、雲華七一歳の天保十四年（一八四三）に及ぶ四十年間の雲華の漢詩等を収録する。しかしその内、文化八年・文化十三年のそれぞれ一年ずつと、文政十年から天保二年にかけての連続する五年間の合計七年分が欠落している。特に文政十年から天保二年の五年間は、「盟友」頼山陽との「最後の五年間」に相当する。

文政十年（一八二七）、山陽は畢生の著作である『日本外史』を元老中松平定信に献納して肩の荷を下ろすと、続けて『通議』や『日本政記』などの「三部作」完成に向けて邁進していた。著述活動だけでなく、雲華や田能村竹田・浦上春琴らとの雅交と詩作にもますます拍車がかかっており、天保三年（一八三二）の逝去までまさにその

「黄金の日々」と言えよう。

山陽は天保三年の六月に吐血、九月に逝去するが、雲華とはその年初、正月三日に面談した。翌四日に雲華は帰省の途についたため、期せずしてこれが両者の「永訣」となった。この日、雲華は何故か朝晩の二回、山陽を水西荘（山紫水明処）に訪ねており、あれが「虫の知らせ」であったかと雲華が追悼文中で嘆くのは、両者の浅からざる因縁を物語るものである。

そのような次第で、雲華と山陽の「最後の五年間」というのは、実質文政十年から天保二年の五年間であるから、この期間の山陽の「絶好調」を考えると、「雲華草」のまるまる五年分の欠落は痛恨の極みである。ちなみに、この期間も雲華が詩作を続けていたことは既に確認しており、今後、これら『遺稿』欠落分の「雲華草」の出現を期待したいと思う。<sup>②</sup>

## 二、新出『雲華草二巻』と『遺稿』収録「雲華草」との関係

今回翻刻紹介する『雲華草二巻』は、雲華の自坊である大分県中津市正行寺に所蔵される雲華自筆写本一冊である。近年購入されたとのことで、ある時期に正行寺から流出していたものとみられる。写本袋綴じ一冊（縦二五、一糎、横一六、〇糎）、表紙に「雲華草 自享和元年至三年二巻」と墨書されている。版心に「雲華室」と刷られた半葉十行有野の料紙三十八丁に漢詩百九十首が記され、朱筆で批正が書き込まれている。奥書等はないが、

筆跡から見て朱批共に雲華の自筆と考えられる。

前述のように、『遺稿』は昭和八年当時に編者が参照しえた計八巻の「雲華草」を翻刻掲載するが、残念なことに、その底本たる「雲華草」の原本は、現在に至るまで全く所在不明であり、我々はその実際の姿を目にすることができなかった。しかるに今回、『雲華草二巻』の出現により、我々はここに初めて「雲華草」の実態に触れることができた。その重要性に鑑みて、その全文を本稿で活字翻刻する次第である。

その表紙に墨書されているように、『雲華草二巻』には享和元年（一八〇一）から同三年にかけての三年間、二九歳から三一歳の雲華の漢詩作品が年次ごとに収録されている。各年およそ制作順に記載されていたものと思われる。抹消されたものや、題のみのものを除き、漢詩の総数は百九十首を数え、それぞれに番号を付した。各年の作品数の内訳は、次の通り。

享和元年（一八〇一）――1～52（計五二首）

享和二年（一八〇二）――53～142（計九〇首）

享和三年（一八〇三）――143～190（計四八首）以上、合計一九〇首

さて、改めて新出『雲華草二巻』と従来の活字本『遺稿』収載の「雲華草」との関係をまとめておく。表1で確認したように、『遺稿』の「雲華草」は文化元年（一八〇四）から残されており、それ以前のものもは収録されていない。ところが新出『雲華草二巻』は享和元年（一八〇一）から同三年（一八〇三）のものであるから、『遺稿』

に連続する「雲華草」であることは明らかである。これによって、雲華の現存漢詩作品の年次が、確実に三年遡るというの大きな収穫である。

もう一つ、巻次について確認しておく。新出『雲華草二卷』は、表紙に「二卷」と墨書されていることによるが、この「二卷」とはいかなる意味なのか。これが「第二卷」という意味なら、更に遡る「第一卷」がかつて存在したはずである。ところで『遺稿』の「雲華草」は、前述のごとく文化元年の「巻五」から始まっており、編者によれば「一二三四缺」とのことである。一方で、新出『雲華草二卷』と『遺稿』収録「雲華草」は収録年次において連続していることも前述の通りである。すると両者の巻次の相違についてどのように考えるかが問題となる。

筆者は、「二卷」の意味は「第一卷」ではなく、「一卷十一卷 二卷」ではないかと推測している。新出『雲華草二卷』は現状写本一冊であって、写本二冊を合冊したような痕跡は見あたらないが、かつて二分冊であったものを合写して一冊にしたものではないかということである。つまり『遺稿』の編者が言う「一二三四缺」の「三」一巻と「四」一巻を合わせて「二卷」としたものが、現在の新出『雲華草二卷』という可能性はないだろうか。

そうだとすれば、更に「一」一巻と「二」一巻があったはずで、それは分冊のままかも知れないし、あるいは合写・合冊されて一冊になっているかもしれないが、ともかくこれが雲華最初期の漢詩作品を収録した「雲華草」であって、今後その出現に期待することは勿論である。この最初期の「雲華草」の内容は、雲華がいったいいつ頃から漢詩製作を始めたのかという問題に直結していて興味深い。これについては筆者に考えるところがあり、後述したい。

### 三、新出『雲華草二卷』と『遺稿』収録「雲華草別稿」との関係

さて、『遺稿』に活字翻刻された雲華の漢詩作品は、実は「雲華草」だけではなかった。『遺稿』二五一頁から二六八頁にかけて、「雲華草別稿」と称する項目がある。これは「野稿」「野詩」「拙稿」などという九つの漢詩稿に、「雲華起草」（禪月大師の山居詩に次韻したもの）と「小城雜題」（自坊正行寺の二十の伽藍・景観を詠んだもの）を加えたものである。これについて『遺稿』の編者赤松文二郎氏は「凡例」で次のようにいう。

雲華草別稿は年代より云へば慥に雲華草の首巻若くは二巻位に有るべきものにて起稿の年月は上人二十歳頃より三十一二歳頃迄の作と見え大抵亀井南冥の批正を受けたるものに係り殊に貴重の遺稿なれとも巻数不明につき暫く別稿と題したり。

以下に述べるように、新出『雲華草二卷』と「雲華草別稿」との共通作品から見ると、この「雲華草の首巻若くは二巻位に有るべきもの」というのは、より正確には「首巻」でなく「二巻」であり、「上人二十歳頃より」というのは、「上人二十九歳頃より」と訂し得る。それでは次に「雲華草別稿」の九つの漢詩稿の内訳を一覧してみよう（表2）。なお便宜上アルファベットをつけて区別した。

表2 「雲華草別稿」内容一覧と各稿末語

別稿	各稿末語	備考
野稿A	「伏乞、成風貴評、大含拜」	/
野稿B	「伏祈、郢正貴評、积大含拜」	
野稿C	「伏乞、雌黄高評、大含頓首」	
野稿D	「伏乞、郢削高評、大含敬具」	
野稿E	「伏祈、郢斧、雲華大含拜」	
野稿F	「伏祈、雌黄評、大含拜具」	
野稿G	「伏祈、雌黄批評、大含拜」	
野詩H	「伏祈、郢斧貴批、积大含和南」	
拙稿I	「伏祈、雌黄貴評、大含拜」	

※野稿Dの南冥評「頃誦法海師詩數首、比諸上人、超乘數等、唯在其鍛鍊与否而已、請上人思旃電勉」

※野詩Hの南冥評「北遊累月、而詩稿未見賢於前稿者。可謂実而帰哉。然詩固難善非銳意可以至々処也。請上人

能勤莫懈怠焉耳。南冥魯僭評」

※拙稿Iの南冥評「陸遜称呂蒙、三日不見、刮目而待、余謂、上人頓悟、不待三日者歟。可謂蘭公有後矣。南冥

魯僭評」

この九つの漢詩稿には年紀がないが、ごく一部の漢詩の題に「壬戌除夜」「癸亥元日」(野稿D)や「享和三年癸

亥春（野稿E）・「辛酉秋日」（拙稿I）などとあることから、漠然と享和元年辛酉から享和三年癸亥にかけてのものかと思われ、それが先の『遺稿』編者の「凡例」の言葉に反映しているのであろう。

ところが今回、新出『雲華草二巻』と比較することにより、「雲華草別稿」の九つの漢詩稿の漢詩総数一四六首の内、一〇六首が『雲華草二巻』と共通していることがわかり、そのことによって、九つの漢詩稿全体の七割以上の製作年次が確定した。それを一覧するのが次の表である（表3）。

○は収録する漢詩がすべて新出『雲華草二巻』と共通するもの、△は一部共通するもの、×は全く共通しないもので、九つの内、○が六、△が二、×が一である。全く共通作品のない「野稿C」についても、その中に「寄祝円上人五十」と題する漢詩があり、これにより享和三年の作品であるとわかることから、「野稿C」もまたこの頃のもの<sup>(3)</sup>と推定できる。つまり、従来判然としなかった「雲華草別稿」の九つの漢詩稿の諸作品が、新出『雲華草二巻』との共通性によって、享和元年から同三年にかけての作品が多いと判明したのである。

表3 『遺稿』収録「雲華草別稿」と新出『雲華草二巻』の共通作品

雲華草別稿	総詩数	二巻共通数	共通性	巻二番号	成立年推定
野稿A	8	8	○	94 98 100 103 96 92 93 97	享和二年
野稿B	20	6	△	48 47 41 39 40 38	享和元年
野稿C	19	0	×	なし	（享和三年推定）
野稿D	21	21	○	124 〜 145 （除142）	享和二年（三年）

野稿E	14	14	○	146 ∫ 158・142	享和三年
野稿F	10	10	○	160 ∫ 169	享和三年
野稿G	24	17	△	173 ∫ 190 (除186)	享和三年
野詩H	16	16	○	104 105 108 ∫ 123 (除114 118)	享和二年
拙稿I	14	14	○	55 ∫ 68	享和二年
合計	146	106	△	別表参照	享和元年∫三年

さらに、新出『雲華草二卷』全体における「雲華草別稿」との共通作品の存在は次の通りである(表4)。新出『雲華草二卷』収録漢詩の総数一九〇首のうち、「雲華草別稿」と共通するのは計一〇六首で、約半数の作品が共通することがわかる。分布状況を見ると、共通する漢詩が一つ一つバラバラに散在するのではなく、Cを除くAからIまでの漢詩稿が、それぞれほぼまとまって布置していることがわかり、新出『雲華草二卷』が、「雲華草別稿」の各漢詩稿のごときものを取り集めて成立したであろう経緯が推測できる。

一般的に江戸時代の漢詩人の、特にその習作の場においては、まず詠作を書き付けた紙片または冊子を、師事する人物に渡す。遠隔地の場合は飛脚等に託す。謝礼を添える場合もある。渡された人物は、語句の訂正や批評などを朱色で書き込んで返却する(第一次作品)。こうして批正を受けた草稿がたまると、更に推敲を加えるなどして、多くは編年で冊子などにまとめて書写しておく(第二次作品)。本人あるいは親族が作品を刊行したい場合は、「第二次作品」をそのまま、あるいはそこから選択して書肆に託し出版刊行する(第三次作品)。およそこうした流れ

である。

これを雲華の場合に当てはめて考えると、『遺稿』収録の「雲華草別稿」の九つの漢詩稿は、現在その現物は一つも残っていないが、雲華と南冥との間でやりとりされた草稿で、そこには亀井南冥などの朱批が書き込まれていたはずである（第一次作品）。そしてある時期にこれらを編年にまとめて書写したのが「雲華草」なのである（第二次作品）。よって厳密には「雲華草別稿」という名称は妥当ではない。雲華の場合、同郷の知己田能村竹田とは全く対照的に、自身の著作の出版願望は全くなかったようで、漢詩集もふくめ生前刊行された著作は、他人の著作に寄せた序文類を除いて何もない。

新出『雲華草二巻』の収録作品（計一九〇首）のうち、「雲華草別稿」の九つの漢詩稿の作品（計一〇六首）と共通しない作品についても、かつてはこれらを記した漢詩稿が存在したはずである。

表4 新出『雲華草二巻』における「雲華草別稿」共通作品の分布状況

					別稿
5	4	3	2	1	
					別稿
30	29	28	27	26	
					別稿
55	54	53	52	51	
I					別稿
80	79	78	77	76	
					別稿
105	104	103	102	101	
H	H	A			別稿
130	129	128	127	126	
D	D	D	D	D	別稿
155	154	153	152	151	
E	E	E	E	E	別稿
180	179	178	177	176	
G	G	G	G	G	別稿

25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6
50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31
		B	B						B	B	B	B							
75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	60	59	58	57	56
							I	I	I	I	I	I	I	I	I	I	I	I	I
100	99	98	97	96	95	94	93	92	91	90	89	88	87	86	85	84	83	82	81
A		A	A	A		A	A	A											
125	124	123	122	121	120	119	118	117	116	115	114	113	112	111	110	109	108	107	106
D	D	H	H	H	H	H		H	H	H		H	H	H	H	H	H		
150	149	148	147	146	145	144	143	142	141	140	139	138	137	136	135	134	133	132	131
E	E	E	E	E	D	D	D	E	D	D	D	D	D	D	D	D	D	D	D
175	174	173	172	171	170	169	168	167	166	165	164	163	162	161	160	159	158	157	156
G	G	G				F	F	F	F	F	F	F	F	F	F		E	E	E
										190	189	188	187	186	185	184	183	182	181
										G	G	G	G		G	G	G	G	G

#### 四、新出『雲華草二卷』に見る雲華の人間関係

新出『雲華草二卷』に出る人名をまとめたのが表5である。これらは主に雲華と漢詩文のやりとりをしていた人物である。まず重要なことは、博多の亀井南冥及びその実弟の幻庵曇栄禅師、加えて南冥の三人の男子（昭陽・大壮・大年）ら合わせて「亀門五亀」と雲華との交際が、享和元年辛酉（一八〇一）から開始されたという事実である。

表5 新出『雲華草二卷』に見える人名

地域	享和元年（一八〇一）	享和二年（一八〇二）	享和三年（一八〇三）
博多	亀井南冥・幻庵禅師 亀井大壮・山口士沛 善立寺西旭尊者 妙行寺	亀井南冥・幻庵禅師	亀井南冥・幻庵禅師
秋月	原古処	原古処	原古処
日田	法海尊者・円遵公 一環円什・法天	法海・法天・広瀬淡窓 森文明	法海・法天・広瀬淡窓

竹田	田能村竹田	
中津	城中諸彦 丸岡仲堅	田文学
その他	服部貞卿（長崎） 服部貞卿（長崎） 梯季礼（久留米） 梯季礼（久留米） 榑田子行（不明） 榑田子行（不明） 淵上旭江（大坂） 淵上旭江（大坂） 龜州師・奥僧寂秀・徳成（以上京都） 山元魯（不明）	梯季礼（久留米） 榑島石梁（久留米）

雲華は竹田満徳寺で出生したが、十二歳で実父と死別すると、伯父円門法蘭師が住職をしていた日田の広円寺に引き取られ、ここで成長する。十九歳の時、実姉の嫁ぎ先でもある中津正行寺の頓慧鳳嶺師に後嗣として迎えられ、以後京都高倉学寮にも籍を置いて本格的に宗学の研鑽に入る。このように、雲華は十代の多感な時期を日田で過ごしたのであるが、その間親しく交際したのが、後に全国から門生が集う咸宜園を創設した、九歳年少の「天才少年」広瀬淡窓なのである。淡窓の記録資料には雲華に関する貴重な記事が散見され、それらについては既に紹介した<sup>④</sup>。

淡窓は早く寛政八年（一七九六）・同九年、十五歳から十六歳にかけて博多を訪れ、大壮を除く「五亀」と次々対面、昭陽に入門し、南冥の知遇も得ていた（ただし寛政十年、亀門の甘棠館は焼失）。雲華と淡窓は、雲華が中

津に移って以降も子弟を咸宜園に入門させるなど交際を続けており、雲華は淡窓から亀井一門の状況を知らされていたと筆者は考えている。

後年文化十一年（一八一四）に南冥が逝去した時の雲華の追悼詩「亀先生挽歌」七絶三首の中にも「曾遊十又四秋前」の句が見えており（『遺稿』八一頁）、享和元年の秋に雲華が博多を訪問して以来、数え十四年間の交際だったようだ。このことは南冥側の資料によっても確認できる。<sup>53</sup>

雲華と亀門諸士との漢詩文等のやりとりにはいくつか興味深い作品も見られ、それらの詳細は別稿に譲るが、一つ、雲華の精神の内面に関わることについて述べておく。雲華は安永二年癸巳（一七七三）に竹田の満徳寺で誕生しているが、これは雲華の「宗祖」親鸞の誕生年である承安三年癸巳（一一七三）からちょうど六百年を経ている。このことは頼山陽の「題大含上人寿像」讚（天保元年）にも詠み込まれており、当然雲華自身意識していたことだろう。

更に、親鸞が修行する比叡山を下り、専修念仏を提唱していた法然に入門したのは建仁元年（一一〇一）である。このことは親鸞にとって最大の「廻心」（宗教的思想の転換）となった。この建仁元年の干支が実は「辛酉」なのであり、やはり雲華が南冥に入門した享和元年辛酉（一八〇一）を遡ること六百年前の出来事である。雲華は自身の南冥入門を密かに親鸞の法然入門に擬していたのではないかと筆者は推定する。

もちろん、親鸞のそれは宗教者として重要な法門に関することであり、雲華と南冥の関係は詩作という俗事であってその懸隔は大きく、雲華自身がそのようなことを公言していたわけではないが、この「辛酉」の年、親鸞と

同じく二九歳の雲華の心中には何か期するものがあつたのではないか。ちなみに「辛酉革命・甲子革命・戊辰革命」を「三革」といい、古来この三つの干支は異変・政変の多い年とされしばしば改元された。

その他、田能村竹田と雲華の初見時期が、通説より二十年以上遡る享和二年であつたことも、『雲華草二巻』により判明したことであつた。<sup>⑥</sup> 秋月藩の原古処と雲華の交際も同時期に始まつたようである。後年文政三年十月に、古処は後に女流漢詩人となる息女采蘋をつれて正行寺に雲華を訪ねている（雲華不在）。

また、中津の人士たちとの漢詩のやりとりが既に始まつていることも注目される。中津での雲華の漢詩関係の活動についても既に報告したところで、文化二年から四年にかけてそのピークを迎え、文化八年以降は見られなくなるが、文政元年の頼山陽の正行寺訪問、天保三年の田能村竹田の同寺訪問は、中津の文人にとって「再結集」の刺激を与えたようだ。<sup>⑦</sup> 梯季礼や樺島石梁など、久留米藩の人士との関係も、目立たぬながら雲華の生涯に継続したもので、後年の内室の出自とも関連して見逃せないところであるが、これらは今後の課題としたい。

最後になりましたが、新出『雲華草二巻』の翻刻をお許しいただきました正行寺住職末弘慶潤師にあつく御礼申し上げます。

- (1) 雲華の漢詩作品の翻刻としては、赤松翠陰編『雲華上人遺稿』（昭和八年、後凋閣）以前に、近代の仏教学者南條文雄が早くから雲華の漢詩に着目し、明治三十八年より宗教雜誌『無尽灯』誌上で雲華作品を紹介していた。その成果を反映したのが、『真宗大系』七三卷（大正三年）所収の『雲華集』であり、更に集を加えたものが『南條先生遺芳』（昭和十七年）である。後者には『遺稿』未収録の関係作品が散見され注目される。
- (2) 『雲華草』については、龍谷大学図書館蔵『正行寺藏書目録』に「雲華草八卷」などとあり冊数一定しない。正行寺所蔵の江戸期の典籍は現在未調査であるが、あるいはこの中から「雲華草」の断片が見つかる可能性もある。この他、雲華自筆ではないが、雲華の「俗弟子」であるという神戸半雲が記録した『半雲隨筆』の中に「雲華起草」と題する雲華の漢詩稿がある（龍谷大学図書館蔵）。その収録作品は、概ね『遺稿』所収のもので、『遺稿』の字句の訂正に資するところ大きい。『遺稿』の欠落箇所が同様に欠落しているのはまことに残念である。これについては別途紹介したい。
- (3) 野稿Cについては、「円什上人五十」が手がかりとなる。日田広円寺の円什師は、天保七年十月五日に八十三歳で示寂している（後掲注4拙稿参照）。これをもとに逆算すると、その生年は宝暦四年（一七五四）となり、その五十歳は享和三年（一八〇三）である。
- (4) 「広瀬淡窓より見たる雲華上人の人間関係」『名古屋外国語大学外国語学部紀要』五〇（二〇一六年二月）。
- (5) 南冥の漢詩稿「辛酉稿」に「北豊大倉上人至幻庵和尚和其途中作余誦而有感次韻呈上人」とあるのが、南冥関係資料における雲華の初出である。『亀井南冥昭陽全集』第八卷【上】四二—三頁（昭和五年、葦書房）。なお、早く寛政二年庚戌（一七九〇）に、日田以来の雲華の「先輩」である法海上人（日田長福寺出身）が南冥を訪問していることを付言する（南冥「南肥法海上人見訪喜而賦呈」）。雲華は南冥について法海からも聞くところがあったろう。
- (6) 拙稿「雲華上人との交流と田能村竹田の画業」『名古屋外国語大学外国語学部紀要』四九（二〇一五年八月）。
- (7) 拙稿「雲華上人と中津の文人」『学芸の諸相Ⅰ』（平成二八年三月、中津市歴史民俗資料館）。

(凡例)

一、底本は中津市正行寺藏『雲華草二卷』写本一冊である。

一、七言詩・五言詩等、七字・五字で詩形を整え各詩に番号を付した。よって改行は底本と異なる。

一、通行の字体を使用し、割注は〈〉、虫損・塗抹・空欄等は□で示した。

一、底本における訂正はそのまま訂した。傍記した文字及び（）内の文字は、今回新たに付した『遺稿』との異同である点、注意されたい。

一、底本と比較して明らかに誤字と考えられる『遺稿』の異字も傍記した。『遺稿』において相当量誤字が存在することを確認するためである。

一、難読文字の読解及び『遺稿』との異同について廣森美枝子氏（小牧市古文書研究会）の御助力を得た。

雲華草〈自享和元年至三年〉二卷（表紙）

雲華草〈辛酉、享和元年、二十九歳〉

寄亀井道載老君子

何凶一夜投前路 却使隨侯按劍看

4 忽投簪笏老南冥 一代行藏托易經

更羨多男堂構美 自教余慶滿家庭

5 先生有弟擘禪師 彩筆縱橫且善詩

不工門中三昧起 隨緣練句坐臨池

6 通仙之嶺竈門山 引領多年想此間

底事泥途侵我錫 不尋瑤草玉芝還

7 江生負笈此遊方 為擬登龍寄八行

1 天生夫子海西州 好古修文絕匹儔

玉振金声今抃地 頼君余響尚千秋

2 曾聞玉帛大方名 鼓篋甘棠館已成

時習詩書多子弟 敝於糸竹滿堂声

3 出匣珠光照乘寒 海天明月自团团

請我驢鳴君叱置 何妨一顧此乘黃

〔江生謂大江曝民也〕

又

8 憐君龍鳳質 況復富雉駒

大澤玄雲合 高岡白日孤

攀鱗空有志 附翼未成凶

此物皆神異 文毛映頷珠

養老瀑贊

9 養老之水 厥旨如酒

維孝子德 天錫爾壽

玉石函蓋銘〔心美濃人睿哲之需〕

10 明珠怪石 各自天真

誰其愛此 彼美之人

初夏雨〔分韻〕

11 層陰積雨意如何 共倚林亭竹色多

更有蛙鳴當鼓吹 靜探詩韻入新歌

五日

12 綠陰翳鬱楚江頭 此日誰憐逐客愁

未盡離騷絳一卷 滿天風雨颯如秋

辛酉雨際家族病疫鬱陶之余賦詩遣悶

13 疫鬼還何崇 梅溼災我徒

魚端千感集 一片寸心枯

自有降魔劍 寧懸辟瘴符

因緣從所擊 只管念浮圖

花下飲〔分韻探韻〕

14 紅桃白李鬪芳菲 綠酒瑤琴對夕暉

秉燭清歡須取醉 春風明月事多違

雷

15 赤日雲膚時 青天遠奮雷

須臾飛電閃 忽爾碾山來

猛雨新蕉破 雄風急浪回

尤惶南帝罰 下擊景山台

山居〔和韻〕

16 一投簪笏老青山 養志雲林日日閑

采藥朝隨樵路去 垂釣暮傍野溪還

別巴政尊者

17 心緣金策水雲飛 日日談絳對翠微

白足由來憐不染 青山何事送將歸

人空法寶弃光彩 世濁僧儀旧是非

為請君家神劍在 一時相擊破重圍

同和留別韻

18 園林五月落梅天 送客江山更可憐

別酒三杯橫笛起 登臨強和遠歸篇

寄法海尊者（早春作）

19 引領知何望 天南有故人

論詩感我拙 學道慕君真

明月珠無價 碧雲吟入神

梅花情不涉 願見一枝新

秋日登山寺

20 纔過初地異晴光 雨後松蘿掛上方

認得木犀花一樹 秋風吹落滿山香

莫秋崎水服貞卿（名忠号雀州）來訪有詩和其韻

21 大江城外古城峰 阜錫多年此寄踪

遠客飄然甘浪迹 窮鄉寂寞愧苔封

只須揮麈論泉石 不妨剪燈報酒鐘

倘問別來交接事 歲寒唯有洞門松

席上和韻

22 疏黃演海大枝城 那料萍蓬接雅声

喜爾詩富多合璧 羞吾道味亦和羹

東林月上分法品 十地雲消敞太清

此夜誰知何浪意 明朝雀錫各分行

十三夜月（分韻）

23 天高月苦客衣愁 把酒南樓與更周

玄菟重攀希逸筆 清風又卜庚公遊

穿雲玉管霜林響 滿地金波雁影流

借問良宵三五後 賞心何賦十分秋

癸錫（已下二十一首遊筑草）

24 雨晴天氣促行裝 忽着青鞋客路長

水馱山村何限興 滿林雲錦曝秋陽

過京都郡

郡屬西豐、即景行天皇長峽宮所在也。今有

荒陵、口碑称女帝、土人祀焉。不知何代

事、蓋史逸乎。

25 古皇遺跡屬西豐 振策俱談一老翁

女帝陵荒疑逸史 京都郡古訪行宮

白雲喬木山河祭 碧海桑田感慨中

徒倚何堪長峽暮 樵歌牧笛起秋風

賀春神宮院（此獻大師講法華地、事出積書）

26 大唐求法利蒼生 為附天書絕海行

如是歸來談妙處 于今草木有光明

宿善龍寺

27 寺接香春第一峰 投來此夜訪靈蹤

千秋不改嶂嶸色 月照山神夢後容

善龍寺阻雨

28 香春山下雨茫茫 一日談經世事忘

為是神僧留我錫 鉢中応呪善龍王

途中作

29 一囊遙向筑前州 路過田河興軫迷

雲樹雨晴香嶽色〔山屬豊前〕 稻林風落染川流〔水屬筑前〕

勢語所出

若非漂泊醉初志 争得登臨賦遠遊

恨有寒砧催客思 數回天未故園眸

〔七八一作、到處洋嶽加有待、好教佳境入吟眸〕

臧胞宮

30 松林十里応神宮 鳳態龍幡望不同

白日高臨朱殿上 瑞烟長護紫垣中

干戈四海欽英氣 神典千秋仰德風

拜罷聊投華表下 數声玄雀過蒼空

訪龜井長君〔元鳳〕 〔君近下居〕

31 新台臨水可褰裳 莫天蘭洲重采芳

安得君家雲錦段 併將霜華照婦裝

又

32 海樓聊駐白雲裳 雨霽秋光壓艷陽

為是林丘論夙志 不知斜日落幽裝

謁龜井老南冥君

33 幾載懷君夢寐勞 一朝萍水此相遭

文鳴鳳闕名難掩 客御龍門氣忽豪

紫塞山形分望秩 玄洋雨色捲波濤

清談未盡新知樂 穆々松風四座高

訪善龍寺西旭尊者有詩次韻

34 業余文酒結交場 或引騷人倚石牀

借問名閔高客氣 何如濁世接清狂

翻經自古多推什 讚偈知誰致統唐

我輩相逢平日意 提來利劍合冰霜

謁曇采禪師

35 曾慕英山文字禪 一時相見復何緣

毫端幻象無量色 塵尾玄風不住天

八角台開通海氣 双林樹槌破秋烟

応機倘許驚岑寂 尺素遙伝雁塔辺

36 龜家天授各儒珍 又見宗僧夙入真

習靜誰甘三味食 觀空已破五情塵

縱令笏室客多士 幾是獅絃屬和人

我亦桑門買余勇 欲待遺法致微身

寓博多妙行寺賦贈住持

37 海天寒雨鉢衣輕 不意萍蓬結法盟

為是塩梅同道味 何論法水甘間情

菅神廟

38 良哉菅氏系 英世 英乘擢儒紳

嘉会逢明主 恩榮列大臣

一時讒佞口 千里左遷人

設致天雷崇 柱世 寧忘柱石身

禁中降幣帛 前王崇廟宇 海內仰明神

松柏梁材古 蘋蘩祀事新

靈池清学字 庙貌肃無塵

拜罷懷風操 梅花照万春

訪秋月文学原君士萌（君時有疾）

39 古書山色蔚佳哉 為把遊囊探勝來

恨值相如当臥病 懶將琴洒上文台

訪龜井仲君大壯 名昇、号雲來、嘗投雲采禪師為僧、近復還俗、時住甘木

40 曾聞神駿属文公 法戰當場氣最雄

更怪三乘失調御 一時奔逸起長風

幻庵 曇采禪師見惠画雀賦此謝呈

41 曾知彩筆簾雲烟 又見神通得画禪

為贈飛來双白雀 更教凡骨伴遊仙

淮南門遵公

42 錢塘阿練若 歲月數周旋

豈啻通家誼 同隨聽法緣

黃花傲霜色 修竹破寒烟

友信君無渝 胡為嘆各天

贈一環法兄

43 浄名踪跡本光塵 伏枕寧知四事貧

為是大悲時現疾 法門能行幾天人

重用原韻寄一環法兄

44 誰知聖默破情塵 摂化多君普濟貧

病後為加香積飯 能將禪悅慰天人

寄龜井南冥前甘棠館学士

45 紫陽城峙表西州 憶昨輕裝覽勝幽

蕭寺石泉論雅思 海亭風月接清遊

松喬百道琴声起 潮去今川練影流

底事一時投袂後 筑豊山色阻離愁

46 謝君交接辱忘年 白髮江湖見鬢然

濟美家声推謝陸 刪詩句氣入開天

已驚珠彩懸南海 安可龍文螿九淵

更憶長風能附驥 幾時重得逐蹏蹏

寄龜井南冥前甘棠館学士

47 君家詞筆尽琳琅 且喜前遊接未光

自考多方依上国 誰憐一衲臥寒鄉

歌成筑樹秋江夕 夢斷豐鐘曉月霜

欲問相思時目送 雁行遙入白雲長

〔七八再構云、欲寄知聚千里字、雁行時人白雲長〕

寄曇采（老） 禪師

48 有緣孤策叩禪扉 幾度談絳倚翠微

鉢備地方香積飯 珠明一室福田衣

玄猿聽法隨行道 異鳥隨時對息機

作札曾辭高顯處 弥天無日不神飛

〔後聯、玄猿昼靜隨行道、異鳥林幽對息機〕

贈山口市沛

49 洛下風流彼一時 筑城寒雨喜開眉

由來聚散長如此 海上秋雲欠別離

初冬城中諸君見訪同分真隨遠公遊之句賦得遠字

50 貝葉霜飛祇樹苑 何凶劍寫勞貧塞

論詩一代壓玄暉 結社千秋羞惠遠

筆染烟嵐見錦披 心忘世俗知雲穩

由來淡水說交情 莫笑寒厨留客晚

一夜靈松〔愈高木某之畫〕

51 靈根一夜鬱成林 北野祠前翠且深

不是至誠能報主 那令貞幹呈中心

千里飛梅〔同〕

52 菅公高詠敵場春 豈但微音哭鬼神

請見飛梅千里樹 德香遐向大方新

壬戌稿〔享和二年、三十歲〕

元日

53 道場初日輒金蓮 起着田衣礼仏天

我法由來多福德 更隨流俗祝延年

朱買臣贊

54 千薪千樵 手不積卷

画錦之榮 千秋不顯

辛酉秋日遊筑婦路過訪淮南法天公、公有詩因次

其韻〔辛酉作〕

55 解束聊依霜樹林 断鴻斜日過孤岑

桑孤遂志秋將暮 竹馬論交夜忽深

千里水雲遊子迹 一堂風雨故人心

文章我輩何寥落 屈指江湖睨古今

同暈前韻賦呈〔辛酉作〕

56 憶昔錢塘客若林

白蓮開社壓盧岑

人留妙偈文無朽〔老師遺稿、布行于世〕

觀入空潭定已深（弘經有水觀、言老師入滅也）

好爾同塵耽綺語

看他絕物欲灰心

由來二諦堆家學

更見名聲起古今

春日得法天公之信、次韻來詩却有此寄

57 告別風霜歲已除 春來錦字落清虛

琴彈白雪論離合 意似閑雲任卷舒

千里會盟多易負 百年行樂竟何如

鶯花最是相思甚 一唱新詩舞踏余

同次韻大原寺集之作聊同其意

58 大原山寺類空居（弘經有空居天） 劍錫乘春踏碧虛

鳥雜梵音鳴且和 霞生彩筆卷還舒

禪林有路離紛沓 座客無談不湛如

更羨登臨携勝具 百年丘壑晉時余

前筑龜井先生賜和重用前韻奉寄

59 海天鴻雁尺書勞 報道萍蓬喜遇遭

詞賦因君才欲展 酒杯容我意何豪

蒼龍雨吼掣雲樹 白馬秋驕噴雪涛

千里浩歌懷此境 南冥皓月一輪高

疊韻（酬）答南冥先生高和之雀什七首（辛酉）

60 諸儒心學宋為師 礼樂何人欲采詩

独有海西文未喪 金和玉節奏咸池

61 地靈人傑古皇洲 旧典寥寥誰復修（原韻備、今換之）

他日窮通君有感 抑揚庶有擬春秋

62 長風雲海簸詩名 變化波瀾老益成

非是百川齊不吐 緇流爭得發心声

63 江湖文事爾何寒 一代空亡老法蘭

到處叢林秋已暮 貝多搖落不堪看

64 我師（指法蘭） 詩偈學西溟（指松浦潮公） 君自同門業六經

此日江湖誰倚賴 夤緣何幸許趨庭

65 一鉢飄然入大方 訪君先拜丈人行

玉芝瑤草松林晚 自訝商顏對綺黃

66 別君東去古書山 人住雲松水石間

為是洋峨隨處在 百年詩伯結盟還

寄秋月原文學（首）

67 芒屨遙謁老南冥 便道過君眼也青

秋月城台高枕藉 古書山色落軒櫺

百年丹葉維摩病 千載箕裘伏勝經

到處新情不淺 遠遊何用嘆飄萍

68 憶君高臥古書亭 力疾玄言倚画屏

秋尽城頭寒雨過 日斜山麓白雲停

縱教<sup>令</sup>會別如弦管 且喜<sup>音</sup>緣任水萍  
起色樽前<sup>音</sup>底有意 胡無鴻雁<sup>音</sup>帛安寧

寄南筑梯季礼

69 一別都門想像中 三秋踪跡各西東  
仄聞掃捍依沙岸 無賴音書滯塞鴻  
冥雨<sup>音</sup>獨觀黃海水 白雲<sup>音</sup>猶阻錦屏風  
幾時詩酒開懷抱 千載川頭得会同

二月十二日有約風雪不至賦寄城中ノ諸君

70 陽春白雪為誰飛 我輩詩盟奈易違

此日山堂空有興 琴尊還使故人非

弊寺集同分韻得山字

71 林風城外寺 野日雨余山

徑石当僧坐 松蘿任客攀

詩成芳草動 意適白雲間

鉢底無兼味 請吟春月還

同分座問屏風六物之一賦得画鶴寒字

72 写生雅鵲羽毛寒 七尺屏風墨未乾

開端曾驚為印石 入窓還愛避彈丸

雕陵似惹莊生感 碧漢空伝織女歡

此日詞筵真報喜 不関横槩魏王看

同次韻權田子行<sup>名幸広</sup>

73 浩歌傾蓋日 狂態拳盃前

青眼寸心赤 玉顏双鬢玄

輕霞隨筆散 流水激琴伝

何限新知樂 春宵秉燭筵

同次韻藤玄簡

74 只使交情厚 何論道異同

狂言能遣意 礼俗豈采躬

白雪彈琴上 青山把杖中

幾時許其度 相与坐清風

同次韻服貞卿

75 負郭因君過 再逢情且多

更憐新草樹 無恙旧烟蘿

家犬馴迎客 野禽來和歌

一尊春酒在 莫逆醉丘阿

幻庵老禪師和予途中作南冥老成用其韻見示重呈

前韻賦謝呈二老

76 山河翳鬱壯神州 筑海人文氣象幽

一代津梁真大士 千秋事業各名流

金絳夜聽竜宮坐 彩翰雲飛鳳穴遊

那料衣珠懷璧美 投來燦爛眩双眸

〔七八一作、驚見衣珠懷璧色、贈來双美燦盈眸〕

龜井道哉先生詩書併至次韻漫興之作却呈

77 卜居高俯大江流 玄海通潮好汎舟

鷗鷺洲邊看得甲 蛟竜窟裡自相謀

陶情竹名樽常滿 作賦波瀾筆不休

此際浩然能養氣 羨君天祿富春秋

和謝龜井先生春日見懷之高韻

78 欲把春醪醉艸香 筑江秋色憶褰裳

謝君情思桃花水 方促豐山遊子裝

同賦謝呈

79 海雲千星擊詩章 鴻雁多情喜欲狂

高臥滄江乘漫興 投來白璧足珍藏

談絳麗日生華旭 把酒春潮自棗浪

更有驢鳴勞一顧 便忘奔題試當場

重用幻庵老禪師見和之韻却有此寄

80 白雲蕭寂虎溪扉 喜見伽陀寄妙微

法雁影過阿育塔 天華香散達磨衣

盧峰落日懸心地 坐海春風靜道機

更報禪余遊戲虛 那無羅漢窟中飛（羅漢窟我邦名区）

寄人

81 衡門本在水之消 万頃鷗波興可知

為問桃花春雨後 幾人同接釣竿糸

寄法海法兄（三首）

82 海公吾党傑 真俗夙知名

讚仏推支遁 談絳掩道生

青山深隱約 白雪主詩盟

昨夜禪房夢 晤言無限情

83 憶昨安居日 祇園与法兄

塩梅分道味 藻鏡鑑孤明

忽別衣珠遠 何來錦字驚

同盟殊厚誼 豈得不陳情

84 婦來南海上 渡世大船師

白業修三際 玄論起六時

浮雲空界散 逝水却波移

再会知何地 慈悲得接眉

書感

85 日暖廬岑鳥雀親 六時修業咷行春

学仙誰慕鸞開士 還俗寧追休上人

感至百年空逝水 觀來七尺欲微塵

吾曹超世緣何事 別有西方轉願輪

寄龜井仲君大壯（先是皇詩未得和章故及七八）

86 聞君隨暑道林遊 豈料詩名削沃州

鍊字如非唐賈島 逃禪恐是宋揚休

竟還大沢風雲起 駿逸青山菡萏愁  
我自空門尚膠柱 素琴能許和歌不

寄法天尊者

87 聞君詩社富 引領欲神飛

綺席千篇詠 青山一衲衣

榻米翻錦繡 倏忽落松扉

兩地殊無遠 鴻魚不復稀

聞法天尊者遊筑前有此寄

88 大藩形勝好探幽 果爾金環振筑州

激水高岑賢士宅 白雲明月客僧遊

清時閱世論微顛 壯志離家任去留

我亦斯間多足跡 到來何地不風流

〈客僧或作故人亦可〉

別意

89 渭城歌罷唱陽關 玉笛春風碧水灣

無數柳枝今短々 折來多少不成環〈多少又作離別〉

三日

90 春風伏枕負年華 雨後青山衲子家

此日咏觴人不問 後庭空对白桃花

答人問含也何人

91 偶爾胎生大塊中 因緣不復假天工

江湖剃髮衣猶白 酒肉安心劍却雄

構室丈方形質託 繡絳万卷眼光通

空王末法微臣在 那与尋常鳥鼠同

鎮西戒壇院

92 憶昔過滄海 隨機授戒師

開場尤首唱 受具軀肩隨

月淨鶯珠色 風香<sup>煎香</sup>仏樹枝

登壇今寂々 立錫淚空垂

山之魯來訪有詩次韻

93 翩翩縫掖映青春 為贈詞花筆有神

百廢山僧驚起座 粲然時搨墨池塵

城中諸彥許餞予于遠風樓走筆代柬

94 市樓高構海門陲 多謝諸賢餞席披

總為鶯花留別意 豈須風雨愆交期

開樽竟日憑投轄 攜藻千秋好賦詩

已恨春潮明月落 不堪車馬散臨岐

同謝丸岡仲堅

95 青山獨臥大江東 折簡因君欲会同

市郭無勞呼麴蘖 郊邨有路引詩筒

風流<sup>煎</sup>飯落他人後 談笑寧隨流俗中

此際沃州殊不遠 莫言春雨煩支公

〔後聯、風流仮落他人後、□□□□時髦中〕（18才）

咏赤穂義士

96 清朝伏劔恨難禁 殉国人臣意氣深

忍恥一時能介石 復仇千載足垂箴

黃泉已朽英雄骨 白日長懸義士心

四十余墳松柏裡 凜然霜色覆寒林

〔第二句一作忍辱三年能介石〕

重寄原震平

97 白雲幽石故人廬 古処山光問起居

点檢晴窓青玉案 業余何惜一封書

遠風樓留別〔分韻得樽〕

98 百尺樓開負郭門 詞盟借座倒離樽

雲辺麗日江山色 雨後輕烟榆柳村

京国人文縱悅目 渭城風物欲銷魂

何時地主能相邀 更把歌詩子細論

又

99 海嶠登樓望 離歌且笑言

遊人帰雁日 饒席落花村

暫別雲千里 多情酒一樽

春宵無限意 綺月照東軒

又〔得〕

100 卜日離筵此結欲 雨余烟景入闌干

人携酒榼多兼味 樓富江山最壯觀

芸海論文高興湧 交場取醉寸心寬

吾曹此会重難得 不妨春宵蠟炬殘

同分題得麦田

〔詩題のみにて詩句なし〕

諸君分賦五色壯予行色漫咏紫聊寓別意

101 虎溪峰上五雲飛 好和炉烟向帝畿

裁筆紫冥瀾且動 駕牛函谷氣空微

斗星吹々応横劍 天路迢々來賜衣

更報凝霞歸到日 接眉同倚暮山扉

同次服子咏白韻

102 珠樹花開雀作群 独振飛錫負清芬

馱經僧策摩騰馬 贈客人持弘景雲

白足冒泥華雨襲 冰心把酒玉台薰

一声瑤笛曉江月 柳絮隨風岐路分

遠風樓留別次野文学韻

103 海門臨別把春醪 大醉狂歌興更豪

客自遠遊將濟勝 人皆寵送且登高

千篇錦壯行裝色 一片帆懸積水濤

此去碧空千里外 豈無明月夢魂勞

聞法海兄入京臨紙有此寄

104 欲從盃渡入京師 病累春風奈後期

浪白岸頭君到日 疏黃洋畔解維時

浪華訪澗白龜時有山水奇觀之著故及

105 不見澗生二十年 如聞足跡遍山川

相逢五嶽凶成後 家住蘆花淺水辺

謝澗白龜

106 君揮神妙筆 □□奪天工

不藉壹公術 乾坤一幅中

詣岡崎祖躅

107 宗師專業地 六百度星霜

請見清池水 涔々可濫觴

陪龜州師會靈山

108 人元靈窟似 地与獨園隣

翠竹高風骨 青山現色身

嫌貪三味酒 喜御大乘輪

此会如常在 何難破六塵

次韻奧僧寂秀贈海法兄之作

109 憶昨都門賦別年 空期錦字寸心存

兼逢此日猶疑夢 東裔西垂路十千

110 海東僧宝見文章 敏捷如鷹自在揚

知是他方遊戲筆 豈無山水被輝光

111 絳台高出洛城隈 君自隨緣惠業開

借問三千雲集士 不知誰是潤文才

五月二十三日靈山会

112 偶謝俊猊座 同登鷺鷥峰

露滋初地竹 風淨上方松

勝境宜遊眺 珍羞足給供

相憐兄与弟 和合得從容

無題

113 醉擁紅顏夜欲央 風來翠袖桂蘭香

簾前笑指天心月 孰与双蛾似箇長

九日登清水寺分得

114 不貪彭澤菊花杯 此日悲秋上梵台

千里山河窮眼界 澹雲疎雨自西来

洛城寄懷龜南冥先生

115 客夜秋高洛水辺 独思夫子軫凄然

載書白雁人千里 寄夢清風月一天

自怨誰家飛玉笛 寧知此夕宴瓊筵

何堪北闕閔西望 不啻豐山阻筑川

洛城留別分韻別字

116 生平不住心 我輩輕離別

此夕月婆娑 千門秋凜冽

人留北闕雲 獨臥西山雪

万里思何悲 臨岐歌未闕

次韻德成送別詩

117 告別祇林風色清 應緣寵送祈秋晴

鄉遙白馬波心寺 望尽青龍雲裡城

此去慈舟堪可泛 將來法劍向誰鳴

綵台独倚弥天月 孰以長安一夜明

姬島

118 水天姬島本無群 日落清容浪作紋

伉儷千春心有待 洗頭盆底翠如雲

自東婦日龜夫子詩至俄次其韻却有此寄

119 新詩遙落故山秋 偶值西婦初下舟

俊句元知凌李杜 名家不復書錢劉

探囊水石情猶動 展卷烟雲墨欲流

朗誦書堂風月夕 更消千里積陰愁

送天法師遊學

120 片雲孤月暫相親 君自無方遊是眞

三駕心同題柱客 一囊時見捨家身

何須蠖屈終生理 遂欲雷鳴轉法輪

不到虛空還有室 莫臨岐路漫逡巡

訪某上人

121 空山通一路 輒夕入精廬

石記禪師座 松標止士居

玄論移白日 幻象望清虛

不問歸來險 臨門有大車

秋尽還鄉

122 千里萍蓬行脚回 故山秋尽意何哀

白蓮葉爛匡廬社 黃菊花殘栗里杯

物候入看傷逝水 色心多病懶登台

拳頭將顧曾遊地 橫海寒雲闔不開

寄懷龜夫子

123 百道松林十里堆 海門新築小琴台

知君善手彈明月 夜靜風濤和曲來

秋夜偶作

124 白雲明月桂花林 招隱詩成独自吟

清興有余秋欲半 更無人向小山尋

偶成

125 蓮池秋露淨 独把数珠親

堪歎匡廬遠 未逢同社人

寄賀龜井老夫子六十誕辰

126 聞道先生耳順筵 青衫彩服映群仙

南山祝壽詩如璧賦 十日為歡酒似泉

藍嶋氣連凝翠樹 竈門雲結煉丹烟

我從方外遙稽首 黃雀一声摩九天

其二

127 福鳳城迴彩雲辺 中有高人鬢尚玄兼向

元自金丹伝妙訣 兼將礼楽育名賢

添籌碧海波心屋 方駕緜山雀背仙

愧我凡庸難換骨 臨風數憶紫陽天

其三

128 滿堂杯酒侍佳期 坐列兒孫仰秀眉

不独謝家生玉樹 応知商嶺産朱芝兼

歡声自有笙歌起 福履何論甲子移兼

卜得群賢湖海会 徳星高榜寿星時兼

其四

129 龜家子弟憶团欒 百道林亭上寿歡

非是主恩投笏去 那合生計卜居寬

風霜不老松千丈 霄漢堪凌竹万竿

竊擬南山歌下里 願君能入素琴彈

寄懷広瀬廉卿（名簡、華名求馬）

130 憶昨称同学 論文劍錫親

橋津勞渡世 礼楽奈安民兼

不有衣中宝 何知席上珍實

時々風月夢 惱殺沃州人

次韻森文明見寄之作

131 秋晚寒林闕梵宮 豈因千里尺書通

愁心寄夢雲光淡白 漫筆題詩柿葉紅

聞道遊囊經筑國北 報知行脚限閩中

近来帰臥無同社 莫説匡廬擬遠公

謝田行蔵

132 君題山水画 便面附新詩

贈我情何厚 清風無已時

抄（兼省日同諸字） 冬登大勝閣分得棲字

133 竹石攀山閣 人烟眺市樓様

如斯足幽意 豈不入新題

興象塵無染 欲娛日易低交際松無恙

誰知最高頂 独使我曹躋

134 桑梓帰省日 松柏会盟時梓桑

有境皆佳趣 無人不旧知

憑高雲物淡 倚檻日暉窺月暉

自嘆漂遊客 重遊未可期我白兼

和答森文明

135 好古歌詩日月新 南冥勝概有其人兼

羞吾一得探奇絕 未入波瀾變化神

留贈森文明用其送別之韻

136 関山雨雪着油衣 歲暮南天客獨歸

鏡水橋頭梅一樹 莫教瑤笛曲中飛

137 燕姬趙女雜弦歌 憶昨同遊發興多

茵莒江干今夜酒 獨將烟月奈情何

138 別來歸臥古城山 咫尺関山易往還

待爾輕裝春草夕 更要詩酒醉花間

得幻庵禪師詩并書却有此寄

139 黃山道者練磨余 五色成章玉不如

裁剪烟雲飛鉄筆 憑陵雨雪拆鴻書

筑州南去天何限 豐水東流歲欲除

安得重揮探勝策 冷泉津上叩精廬

次韻 答南冥夫子見寄

140 関西夫子信 昨夜落茅廬

何尚瓊瑤報 更懷江海居

名聲推伯起 賦筆有玄虛

願我侵春草 重馳問字車

(壬戌) 除夜

141 守歲叢林夜 焚香古仏前

鐘聲何処度 灯火上方伝

飲食依毫賜 妻孥任世纏

明朝三十一 犬馬又加年

補遺

舟泝奠水

142 十里通牽路 兼葭百丈船

黃昏篷底坐 看画浪華川

癸亥草(享和三年、三十一歲)

(癸亥) 元日

143 大東文物太平春 日出叢林歲也新

好探紅梅須遣興 還酌椒酒欲同塵

遊方賦筆逢名士 拙度津梁愧末臣

纔弄彩霞峰上色 醉題詩偈報佳辰

同

144 三元阿練若 讚仏有歌詩

海曙春霞色 梅開臘雪枝

朝家無事日 野衲安身時

治化懷神祖 恩光及我私

誦法天子元日詩有感賦贈

145 大志浮踪客 春歸尚異鄉

題詩初日上 呪梵野梅香  
桂玉応加飯 萍蓬暫解裝  
人間知夢境 百福不無祥

人日雪

146 乾坤猶臆節 物色自春華

大雪逢人日 寒梅護仏家

授來梁苑簡 題遍漢宮花

欲極層樓目 何山弄赤霞

首春大雪（二首）

147 春來盈尺雪 詩伴欲何求

千里凍雲色 一行藍水流

春雪

148 山寺寒猶在 野村春自回

朝來聊着屐 雪裡折紅梅

絕句

149 濟南吳下主詩盟 芸苑當年各美名

廣得李唐初盛響 翰花融朗耀朱明

寄古処震平

150 古処風人是謫仙 豈無詩酒繼青蓮

看花聽鳥山城夕 飄逸能成幾百篇

雪後登觀濤閣

151 同雲亭午霽 積雪試躋攀

詩就多神境 嶙峋海上山

漫題淡婆菰（朝鮮呼名烟酒、事見羅山集）

152 有草名烟酒 微醺醉白雲

忘憂如此足 握管口氣氤

讀太白（詩）集

153 飄々又忽々 想見李青蓮

敏捷何佳絕 從橫即自然

情知詩入聖 豈但酒稱仙

遺草人間世 風流斗百篇

讀老杜（詩）集

154 美哉少陵氏 詩律自儒冠

一代沈雄語 千秋大雅看

声音中金玉 變化起波瀾

輒頓干戈際 遺篇擬議難

癸亥春將遊筑前不果賦此（奉）寄龜夫子先生

155 春來還百冗 杖屨誤良緣

獨自懷詩聖 無由對酒仙

援毫香草際 伏枕白雲辺

佳句知多少 神飛落日前

春夜与法天賦天有將遊方之志得花字

156 有客將臨別 春宵剪燭花

羨君逐雲水 棄我屬桑麻

不住名山錫 無聊陋巷家

情親惟淡薄 石鼎對烹茶

次韻遊京人之作

157 十五胡姬髮若雲 柳腰桃鬢口氤氳

縱令一片冰心潔 或恐烟花惱殺君

寄樵石梁

予也好時彥手迹、而未得故如來紀氏為憾、聞

樵石梁有師友素、想當多藏、故請及七八

158 石梁居士旧風流 曾學龍門賦遠遊

千里雁魚難寄字 十年花月轉添愁

東都会友時名大 上国伝経教化周

君自如來山畔客 愛吾能贈片雲不

送宗僧法天遊学

159 天公同学好 況復是吾宗

竹馬堪懷旧 箕裘可踵蹤

飄然何氣宇 峻立見才峰

告別河梁日 雲山思万重

寄田文学頃卜居嶋田村

新莊村二首

160 田君儒雅士 退食愛村居

近市宜沽酒 名山對著書

風烟千頃麦 夜月数椽廬

賀客隨春燕 新莊雨霽初

161 近來村落寺 花木雨余春

課業呼釋納 裁詩憶故人

東林風已定 万象望逾新

独聽嚶々鳥 上方求友頻

野橋春水圖

162 一行春水艸如烟 雨後桃花浪欲然

借問采芳何處去 杖藜人立野橋前

次韻幻庵法師元日遊函林之作却寄

163 不抗王侯礼 元朝且野行

梅欺冰雪潔 松帶海霞生

古塔棲馴鴿 叢林認早鶯

春風千里外 此日最閑情

次韻龜井夫子元日之作

164 江湖投老地 歌頌肇陽天

抱甕傾家釀 開園摘野鮮

詩書因染聖 藥物不求仙

欲擬時名大 春濤動八埏

秋雁驚夢

165 秋風吹雁渡江關 八月雨中客未還

月落羈亭鄉夢斷 聲々遙入白雲間

秋江夜泊

166 洞庭秋水欲涵天 落月疎鐘夜泊船

客子篷窓猶未睡 蕭々木葉逝波前

謝呈幻庵禪師

167 禪林推有道 芸苑亦知名

俗諦如華筆 真門為物情

風旛高日氣 灌木蓄春聲

拜謝金仙讚 光雲壁上生

龜夫子見視和高原教授之作次韻却奉寄

168 不獨叢林礼樂衰 只今台閣奈陳詩

驢肥苜蓿春風起 鳳去梧桐夜月悲

漫說燕王能致士 寧教尼父不知時

請吾書札君休叱 方外斯文欲問誰

龜夫子錄視和今村大夫之作次韻奉寄

169 重思勝概整征裘 宿志風塵不得酬

采葉松間隨異艸 投竿石上坐清流

衡門或引山人入 小艇時迎酒客浮

總為先生能惠我 褰裳要涉筑江秋

与龜先生書

170 惜哉、貧道之於先生、但一謁門下耳。而思先生不報

之德、未嘗不欲衣鉢拜趨、而鳴謝函丈也。顧以法事

鞅掌、惰氣日長、未能奮飛也。然先生之温厚、不以

譴劣遐棄。況乃悠悠開河而不断鴻鯉、慈教數至、差

亦深矣哉。先是貧道聞之、老伯父錢塘、我昔也受業

于潮公、後有筑生龜井者、誕遊焉。才器磊落、勤學

不倦、則私念之、當不難乎。其大成也、潮公奇遇

之、今也果興學于其國、立為甘棠館祭酒、詩書訓

義、礼樂建德、大有育英髦、天下之士、為是聞名至

者、東輿之東、西裔之西、無思不服、濟々乎復盛矣

哉、可謂人文之藪也。我老矣、汝小子輩、當今之

時、欲肆斯業舍旃安適、我於祭酒、固有同門之誼、

則汝若志學欲使汝賴麻中之化、然貧道不幸、老伯父

未幾而化、尋聞先生亦解職、官禁外交、於是貧道

乎、不知出策、而素願不可曠日、夜景仰先生之門久

矣、一朝幸通刺于左右、而後先生之慈、加於骨肉、

何福加焉、且貧道之有詩癖、自不以拙為解、敢汚先

生之筆研、復何足勞鄙人之斧者乎、辟之材、則或曲

或朽、雖公輪之巧、而復不可彫者也。然先生成化、

辟如甘雨之降、凡百艸木未嘗不各遂其生也、貧道如

某、亦不小成乎、又嘗問文、先生曰、謀諸兒輩蓋非

溺愛也。是以請益長君云々。之視貧道、猶先生、幸哉、貧道辱先生父子之寵異、乃我法所謂不小因緣也者乎、曷敢忘也。

置書郵者乎。但寒鄉之便、所以不得已也、拙詩二章、敢祈是正。

与龜長君

171前月緇介還、承枉復書、亦知足下偶有微恙、定是時令不正所使也、方今和氣既想當復初、善自珍重、千万是祈、厚哉、長者愛人也、辭不以病、辱論作文之事、併復肥大夫貴書、捧誦十回、敬領高誼、野納何以得此於足下乎、野納固是叢林之士、而才学淺劣、豈有一篇文、以請正於足下乎、野納心实愧之、雖然若其以拙自藏、則所謂固陋者、而一朝忽填溝壑、百年遺憾、嘯臍尚不可及、亦愚之甚也、况乃得善誘於足下、不復幸乎、於是貧道聊試起草、敢呈足下、若其巧拙未可論也、但請諄々之益已矣、足下其垂鑒焉、來書曰、別欲刑削贖、而風感未成、容附便、候之候之、頓首再拜。

村上(氏)宅贈(別)筑後梯季礼文学時將遊豊東温泉分得花字

173山水探奇士 風流愛客家

儒林元拔萃 賦筆若飄霞

十日千鐘酒 三春万樹花

朝來随意去 詩興滿輛車

174君裁春服罷 遠欲浴靈源

麗日宜風詠 良宵暫笑言

同車吾豈敢 濟勝志猶存

到底驚珍怪 湯泉半冷温

175豐東遊浴处 水槩自冷然

海闊疏黃日 山高紫極天

盤餐朝市菜 肉酒暮江船

此際知幽適 何論猷賦年

与広廉卿

172淮水詩興近来如何、想当有觴咏之事、請勿惜後音、一封書重煩左右、願待筑信而附之、貧道豈以足下作

采蓮曲

176雲為鬢髮雪為肌 纖手蘭橈妖態遲  
采々蓮華烟水裏 不知同幹欲貽誰

〔疏黃漢名、紫極山名、得年字〕

〔采々蓮華烟水裡、不知同幹欲胎誰〕

春日寄人

177 美人何在水中央 采去頌頌篋篋杜若香

欲濟盈々波且急 桃花岸上奈無梁

春日助部村送梯季礼

178 相送春風出郭門 雨晴江上綠楊村

青尊尊末末尽尽班班荊荊語語 無數白花驚別魂

寄呈幻庵曇榮禪師七首

179 莫言禪教不相容 奉奉仏仏叢叢林林各各寄寄蹤蹤

請見江淮河漢水 決決々々大大海海是是朝朝宗宗

180 汎瀾靈海儲珍奇 処処々々扁扁舟舟垂垂釣釣糸糸

方憶珊瑚明月夜 長竿誰誰扞扞兩兩三三枝枝

181 釣得珊瑚載月歸 上方花木夜清輝

起吟詩偈絳行処 不不尽尽香香風風落落納納衣衣

182 百練金剛養法身 偶然遊戲世間春

落花啼鳥心何管 自有青山不負人

183 青山白水見禪心 好是洋峨可写琴

定起獅絃歌一曲 調調高高空空外外絕絕知知音音

184 獅獅絃絃一一吼吼動動威威聲聲 海海沸沸山山崩崩百百獸獸驚驚

愧我叢林荊棘裏 臨風漫作野干鳴

185 宿福由來有定期 清塵濁水得相知

謝君新攀金仙偈 變幻何能贊一辞

復法海兄書

186 肥之距豐、不過數十里耳 而音問何其濶也、前日偈

貴書達自大坂、蓋在家父緘中云、是首春入京、買舟

于小倉、開帆後數日而舟子探出諸懷拆封書、附二

詩、就審左右踊躍無量、至如南冥未使、鷓鴣徙北岳

聊隨猿雀親殆乎視諸目睫之間安得無令小弟感起、不

知今已移文否、小弟私窺候焉。家父近信云、羽州邪

軍舉旗乞降、嗚呼吾党之士、豈不凱歌乎、方令賦將

已伏計知誌邪徒、不攻自威服、寔法門之大幸也、

又鷹公之令季、入道歸化〔于我遇焉〕

本師上人云々、乃以連枝之遇、而住持于越中瑞泉

寺、高陵嗣講受命開筵、又永臨講主有閩東之命、蒼

皇首塗于閏月十七日、下間法印与焉。蓋足觀我門之

光云、欣喜之余、覓信以聞法兄、書不尽言、臨紙艸

復。

寄(呈) 龜家子

187 家訓多育士 汎愛及桑門

敢問文章業 深羞鄙俚言

含英遊芸苑 視草刈荒園

貝典今如如今至 因君願自欲試一翻

暮春寄梯季礼（時在東豐）

188 石垣原上眺行春 白日天陰古塞塵  
不没英名芳艸裏 殘碑一片弔忠臣

静女怨

189 賤妾侍源君 恩情執巾櫛  
假令生別離 期死抱貞一

190 起舞終今誰為 窪岡翻袖時

郎君行不返 曲々寄相思

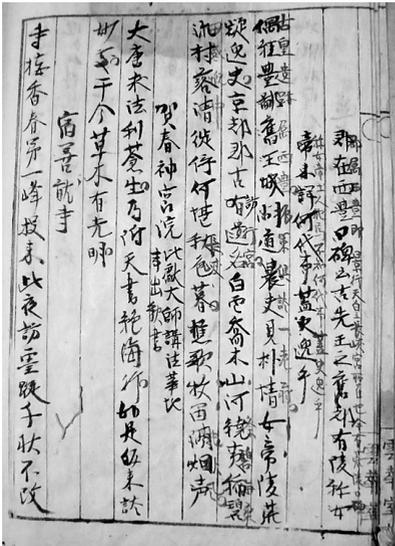
讀大白詩集（改作出後）

153 歌詩何俊逸 不但酒中仙  
敏捷揮佳絕 徒橫即至然  
雲飄廬草日 花發翰林年  
遺響人間世 誰知斗百篇

讀少陵全集（同前）（29才）

154 美哉少陵氏 詩律自儒冠  
一代珍雄語 千秋大雅看  
声旨雅金玉 變化起波瀾

品得周公作 遺為擬議難



『雲華草二卷』(部分)